

Title	「ローカルなもの」の様相：オルゴゾロの事例から
Author(s)	井本, 恭子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2012, 46, p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27212
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ローカルなもの」の様相

— オルゴゾロの事例から —

井 本 恭 子

キーワード：ローカルなもの、オルゴゾロ、牧夫、^{オスピタリタ}客人歓待、
ツーリズム

はじめに

場所性、価値（意味性）を捨象し、自然から空間を切断したところに現れる「均質空間」[原 1975]の遍在は、言いかえれば、「文化と地理的・社会的領土との〈自然な〉関係の消失」[Canclini 1995: 229]、世界の白地図化である。これがモダニティの様相のひとつだとすれば、「ローカルなもの」はその不均質さゆえに、異質なものとして周縁化されることになる。その場合、「ローカルなもの」はつねに他者によって表象され語られる対象、相対的に従属的位置に配される側にある。つまり、その場所から完全に隔たった力の影響を徹底的に受けながら、形づくられてゆくもの、操作する主体の力と位置に規定されるものと言える。「ローカルなもの」は決して自明なものでも本質的なものでもなく、近代化やグローバル化といった状況に応じて、いかようにも構築されうるものとみなされる。ならば、その操作性と選択性に関わる主体の位置を明らかにした記述・分析が求められるのは、当然であろう。

しかしながら、「ローカルなもの」とは認識可能な、決定可能な、孤立させることができる異質性や差異を創出するシステム（力と位置すなわち視

覚の問題)に収斂させてもよいものだろうか。その場所(現場)と切り離されない具体的なモノや対面的相互行為が、「あの包括的な経験、つまり、一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」[レヴィ＝ストロース 1972:407]ということにもとづいた関係とともに現れる操作性や選択性は、再ローカル化のありようとは、どこか違うような気がする。「ローカルを作るためにローカルなものを利用する」状況を再ローカル化と呼ぶならば、そのジグソーパズルを組み合せるようなやりかたと区別しながらも、共存させるような柔軟な何かが見落とされているのではないか。

本小論の出発点は、「ローカルなもの」は視覚対象化され、異質化されたものでしかないとする考えに対する違和感にある。そこで、異質性や差異(ある種のエキゾチズムと言ってもよい)の刻印と場所の形成がみえやすい現場、「ローカルを作るためにローカルなものを利用する」ツーリズムの一例としてサルデーニャ島を取りあげてみる。この地中海第二の島は、1960年代から地域振興政策として観光開発が推進されており、自然・文化的資源が「ローカルなもの」として特殊化(固有価値の再導入)される具体的なプロセスとその場を生きる人びとの日常の実践行為とのかかわりを考えさせてくれるからである。ここでは、G. Satta のサルデーニャ島内陸山地の村オルゴゾロとツーリズムに関する一連の論考を手がかりに、「ローカルなもの」の二重写しの一端を示してみたい。

1 ファンタスマゴリア 幻灯劇 — 消費される場所 —

ギデンズはモダニティの出現によって、「場面を形づくるのは、たんにその場に存在するものだけではない」[ギデンズ 1993:33]、空間と場所の切り離しによって、場所が次第にファンタスマゴリック「幻灯劇風」になってゆくと言う。観光パンフレットをみるだけでも、商業主義やローカルの生産体制によって、場所が形成されては消費されてゆくことがわかるだろう。ここでは、

ツーリズムに現れる場所がどのように形づけられるのか、イメージと具体的な存在による風景について、言いかえれば、ローカルという可視形態が考察の対象となる。まずは、事例となるサルデーニャ島の観光開発を概観しておこう。

「まっ白な砂浜、透きとおった海、紺碧の空、この地はイタリアのすぐ近くにある〈楽園〉である」と、ヌーオロ県観光局発行のパンフレットの一文にあるように、サルデーニャ島＝楽園のイメージはいまではすっかり定着しているが、1950年代まではシチリアやコルシカほどの知名度はなかった [Satta 2001]。せいぜい島内の都市住民が夏の休暇を近隣の海辺で過すか、狩猟家が野性味あふれる内陸に魅せられてやってくるだけの土地、いわゆる観光の対象ではなかったのである [Le Lannou 1941]。

サルデーニャ島が観光地として広く知られるようになるのは1962年以降、経済的後進地域とされたイタリア南部の再生計画の一環として、州・県行政が観光産業に力を入れるようになってからである。世界屈指の高級別荘地である北東海岸一帯コスタ・ズメラルダの誕生もこの頃であるが、当時は外国資本による開発で〈楽園〉を手にするのは一握りの富裕層でしかなかった。いずれにしろ、州・県単位で観光局は太陽が燦々と降りそそぐ海辺のリゾート地という近代的なイメージを生産する一方で、伝統的な祭に代表される習俗と主要な地域を結びつけて売り出したのである¹⁾。州都カリアリは聖エフィジオ祭 (5月)、サッサリは騎馬祭 (5月)、ヌーオロはレデントーレ祭 (8月) といったように。

こうした伝統と近代を対置させるような島の観光開発に転機が訪れるのは、世界で「持続可能な発展」と「自然環境保護」が叫ばれ、地域固有の自然資源と文化資源の持続的な活用をめざしたエコツーリズムやアグリツーリズムという観光形態がでてくる1980年代である。この頃から、内陸の山地でも自然と伝統的な牧夫の世界を一体化させ、自らの全体像を

主体的につくりだそうとする動きがみられるようになる。1990年代の終りから2000年にかけては、EUのボトムアップ型の農村活性化事業であるLeader+ も追い風となり、開発で様変わりした海岸部とは対照的な山地一帯の自然・文化の価値づけに取り組む、地域活動グループがでてくるのである [Masu 2002]。

では、ツーリズムのなかのサルデーニャ島の場所性（他の地域と差異化できるそこにしかないもの）はいかなるものであったのか。その変遷をたどるのは興味深いテーマではあるが、筆者の手に余るゆえに、ここでは、ツーリズムに参入した1960年代、バルバージャと呼ばれる内陸山地一帯の自然とそこに暮す人びとの典型化によって創出された場所性、すなわち、イメージを支える具体的存在によって再構築された場所をのぞきみるとどめておこう。

1960年代からサルデーニャ島の経済政策の一環として、州あるいは県レベルで観光事業に力を入れてきたことはすでに述べたが、「訪れるべき場所」としてつくられた島は、どのような特徴をもっていたのだろうか。ツーリズムのなかで浮上した島は、対照的なふたつの要素、夢のような日々を過せる〈楽園〉の「海」と〈ほんもの〉のサルデーニャ（原初的な土地と人の特殊性）が息づく「奥地」から成る場所で、前者のイメージをコスタ・ズメラルダ（北東海岸一帯）、後者をバルバージャ（ヌーオロ地方の山地一帯）が支えるという構図になっていた [Satta 2000, 2001, 2002]。こうした海／山のコントラストによって空間（楽園／奥地）と時間（いま／太古）を異質化して、サルデーニャという視覚対象を仕立てる基本的な図式は、いまではすっかり定着しており、近年では「生きる民族学博物館」（多様な文化が刻印された場所のカタログ）という宣伝文句で、新たな場所の可視化も進行中である。

さて、この空間から場所がつくられる、すなわち、一連の要素の再ロー

カル化による「ローカルなもの」の創出であるが、それをもう少しヌーオーロ地方の山地一帯の具体性にそって見てみよう。Satta は、ツーリズムの場所は、そこにしかないものを、目を引くものを連結させて意味づけられていると考え、サルデーニャが手つかずの自然な風景と土地に根ざした人びとの暮らしの重ね合せとして提示されることに着目する [Satta 2001 : 55-57]。そして19世紀に島を訪れた旅人たちが判で押したように、土地と人びとの習俗に目を引かれて書き留めてきたことを指摘しながら、その飼いならされていない自然に原初的な生活様式が重ねられた典型によって、サルデーニャという場所が画定されると述べる。少し長くなるが以下に引用しておこう。

初期の旅人（イギリス人、フランス人、それから少し遅れて半島のイタリア人）にとって、その島は近接したエキゾチックな存在である。それは太古の風変わりな土地、ヨーロッパ大陸のすぐそばにあるのに、それほど知られてはいないし、おそらくは、はるか彼方のポリネシアの島々や南米の平原ほどには文化的にへだたっていないところなのだ。旅行者たちの興味を引くのは、聖書やオデュッセイアの古代オリエントとの比較からでてくる〈アルカイック〉で〈野蛮な〉牧夫と農民の習俗であることが多い。それらは、ときには島の小さな都市のエキゾチックなところはほとんどないが、かといって一般にみられるものとも違った習俗に對置される。サルデーニャの異質性の特徴は、旅人たちの記述におもしろいように並んでいる。復讐、葬送の哭きうた、アッカバドラス²⁾、色鮮やかな衣裳、バルバージャの踊りと唄が、ほぼ一世紀にわたって繰り返し記述され、ヨーロッパの読者の今とは異なりへだたった時間のなかに、みごとに凍結された土地の肖像を描いている。

島の異質性を表すもののなかで、何よりも旅人たちの心をとらえているように見えるのは、典型的な特徴をおびて、サルデーニャ島とそこに暮す人びとを象徴する存在である。つまり、敵には冷酷非情であり、よそ者には気さくで寛大な牧夫－山賊のことである [Satta 2001 : 53]。

19世紀の旅人の目を引いた異なる時間（太古）に生きる土地と人びとを再現したものが、海と対置される〈ほんもの〉のサルデーニャであった。ほかと共有されえないもの、この場合は異時性、本質的な「原初性」（永遠の姿）が刻印された場所を、文化の介入を許さないような自然とそれに抗うように生きている人間を配して視覚対象化したものだと言えるだろう。この空間と時間の「原初性」を可視化する場所として画定されたのが、バルバージャと呼ばれるヌーオロ地方の山地一帯であり、峻厳な山スプラモンテと牧夫－山賊によって典型化された村オルゴゾロである。このように当時のツーリズムに供されたサルデーニャ島は、バルバージャでサルデーニャを、オルゴゾロでバルバージャを、スプラモンテでオルゴゾロといったように、要素が全体を表すように同心円状に、外から内に向うほど深層に近づくように配置されており、その精神性はつねに奥地と一体化した人間のプロトタイプ、牧夫－山賊が担っている。つまり、観光対象になったのは一連の要素の組み合わせによってつくられた、「サルデーニャ島」と呼ばれるゼロ・ポイント（変化しないもの）である。

このような変化と対置される自然と人間の風景の重ね合せによる異質化は、1960年代、観光開発を進めた行政サイドの操作の一例であるが、要素の選択と操作にみられるメトニミー関係（換喩というよりも提喩）は意味領域のさらなる拡大を予想させる。そうなると、場所はもはや幻灯劇の舞台でしかない。事実、種々の操作主体（行政機構、企業、地域活動グ

ループ、ツーリストなど)は、「目を引くもの」を組み合わせながら「ローカルなもの」を形づくり、「××」と刻印される場所を絶えず生産・再生産している。しかし「ローカルなもの」は、ツーリズムのなかで商品化される一方、その場で絶えず生きられるもの、全景であると同時に前景でもあることを忘れてはならないだろう。

2 <ほんもの>のサルデーニャ、オルゴゾロ

観光対象のサルデーニャ島は、一連の要素の組み合わせによって理解可能な(見える)場所となり、「全体は、もっとも<本質的な>、一つしかない独自の刻印と見なされる特性(この場合は原初性あるいは原始性)を保持している部分に、そのつど代えられる」[Satta 2001:66]、同一性の幻想によって支えられる場所である。この同一性を「ローカルなもの」とすれば、配置(ラベリング)する側(観光局、旅行会社、ツアー主催者、ガイドなど)から、自らの位置(ポジション)を示す側(地元住民、地域活動グループなど)から、その真正性(ほんものであること)が誇示されよう。そしてツーリストは、観光情報としての「ローカルなもの」「真正性」を現地で見たり(そこにあることを確認)、自身が見える風景をつくりあげたりする。つまり、「ローカルなもの」をめぐる要素の選択・操作主体(情報発信者)や伝達手段が多様化するにつれて、その風景はますます錯綜してゆくのである。

つねに<ほんもの>の看板を背負ってきたオルゴゾロは、岩だらけの山と森林からなる自然、そこに潜む牧夫-山賊、村内のいたるところに描かれたムラレス(壁画)、鉄兜のような伝統的な女性の被りものといった要素によって、その原初性を保持する孤高の、抵抗する村の風景を見せてきた。³⁾そこに峻厳な山スプラモンテを舞台に、ツーリストが<客>^{ゲスト}役(もちろんツアー企画なので有料だが)となって、<主>^{ホスト}役の牧夫たちの

饗応を受けるという生活文化の一場面が登場するのである。



写真1 オルゴゾロ全景



写真2 ムラレス

Satta はこのようなツアーにおけるオルゴゾロの役割について、ツアーリスト、地元住民、ツアー企画者の間には「オルゴゾロは〈ほんもの〉のサルデーニャである」という理解がすでにあると指摘している [Satta 2001, 2002]。たとえば、「××人は・・・である」というステレオタイプを用いて、オルゴゾロの真正性が語られている。

カリアリ人、サッサリ人、カンピダーノ人、ガッルーラ人は、ともかくにもサルデーニャ人であるが、バルバージャ人のように〈ほんものサルデーニャ人〉ではない。バルバージャ人もみながすべて、オルゴゾロ人のように〈ほんもの〉というわけではない。ヌーオロ人はいまでは都会人となり、もはや歓待がわからないし、オリエーナ人は「アイデンティティがない」（アイデンティティという人類学的言い回しを流用した、敵対者に向けられた近代的な侮蔑）し、マモイアーダ人はイタリア半島の流行をなんでも取り入れ、子供たちにはサルデーニャ語よりもイタリア語を教えている [Satta 2001 : 75]。

第1章でみた「サルデーニャ島」という場所の画定と同じように、スプラモンテ、牧夫、〈客人歓待〉といった断片によって、喪われた原初性（それが幻想だとしても）が再提示される空間が、〈ほんもの〉=オル

ゴーズロという場所として現れるのである。「サルデーニャには羊と牧夫しかいない」という記述、オルゴーズロ、バルバージャ、移動牧畜、牧畜社会の制度が、もっぱら人類学の調査対象とされたりしている事実からも、〈ほんもの〉という本質化や土地と文化の自然な結びつきを自明のものとしていることがうかがえるだろう。⁴⁾

3 <牧夫と昼食>

オルゴーズロ（という場所）は、原初性（エキゾチズムという異時性）を保持した牧夫世界として表されることは、すでに見たとおりである。近年はもっと目を引くような「ローカルなもの」が要求されて、牧夫の生活や慣習の固有性を可視化するだけでなく、現地体験させる場をつくるようになってきているが、それは地元の自己演出の場でもある⁵⁾。地元発信の〈牧夫と昼食〉ツアーは、その一例であろう。宣伝パンフレットをみると、「古の大地の最も自然な味の発見」「古来のトキワガシとビャクシンの森で牧夫が用意する食事」「自然とのふれあい」「労働から祭りまで、サルデーニャ人の強い連帯結束」といった文句が並んでおり、ここでも太古からの連続性や土地柄が強調されている。つまり、〈牧夫と昼食〉ツアーは、牧夫がツアーリストに野外で食事をふるまうことによって、「家は狭いが、心は広い」という〈客人歓待オスピタリタ〉が〈いま・ここ〉にあることをみせる企画だと言ってもよい。⁶⁾

では、Sattaの報告[Satta 2001, 2002]するヌーオロからオルゴーズロの半日ツアーに組み込まれた〈牧夫と昼食〉を素描してみよう。まず、ヌーオロの民族学博物館で伝統的なサルデーニャ文化を見学したあと、観光バスはオルゴーズロへ向い、〈牧夫と昼食〉の主催グループが待つ広場に12時半ごろ到着する。すぐに、観光バスは主催グループのジープに先導され、〈牧夫との昼食〉の場である、居住地と峻厳な山のあいだに広がるトキワ

ガシの森林地帯までツアーリストを運ぶ。そこは1980年代に行政がピクニックやキャンプができるように整備した一画で、誰でも利用できるため、休日には島のあちこちから人がやってくるが、主な利用者は〈牧夫と昼食〉の主催グループである。いずれにしろ、標高1000メートルの高地に広がる森林地帯が、牧夫の〈客人歓待〉の場として選択されている。

現地では牧夫たち（ツアー客の人数によってリクルートされるが、必ずしも牧夫とは限らない）が用意した食事がふるまわれる⁷⁾。そのメニューは主催者グループが決め、基本的にはサラミ、仔豚のロースト、チーズ、赤ワインである。すべて自家製（サラミは隣接する村オリエーナから調達する）で、仔豚はツアーリストの目前でローストしてみせ、〈牧夫〉が山であった見知らぬ人をもてなすように、〈客〉の皿が空になっていないか気を配っている。食事が終わるころになると、テノーレスと呼ばれる男性多声合唱や伝統的な円舞がはじまり、最後は〈牧夫〉たちの自家製の特産物（チーズ、ワインなど）の販売で締めくくられる。そして再び村に戻って、ムラレスを見学して半日ツアーは終了する。

このような〈牧夫と昼食〉は、〈客人歓待〉によって牧夫世界を体験させるものであるが、それが「過去への逆行」ではなく、そこにいまある、生きている「ローカルなもの」〈ほんもの〉として示されていることに注意しなければならない。たとえ、「まったく根拠なしに、ある生活の標本を地域の固有性であるとみなす」[Angioni 1989: 9] 異質化であることに変わりはないとしてもである。事実、Satta の挙げている事例をみるかぎり、〈牧夫と昼食〉は場所にしろ牧夫にしろ食事にしろ、すべて典型化されて「もてなす—もてなしを受ける」関係にそって組み合わされたものである。そもそも〈客人歓待〉の慣習をホスト—ゲストの関係にみられる饗応と一義的に捉えなければ、これらの要素間に自然なつながりをつくることはできないだろう。一方、そこには自己演出の過剰さがみられない。場

所には飲用水もベンチもある森林地帯が選ばれ、牧夫の着衣に目立った特徴もなく（さすがに博物館や祭りなどで見られる伝統衣装ではないにしても）、フォークロアや特産物販売といったもてなしとは別のローカル色を示す要素を加えている。もちろん、単にへたな芝居にツーリストが鼻白むという理由だけなのかもしれない。だが、そのいまある姿の「ハイブリッド性」は、「ローカルなもの」のもうひとつの様相を示しているように見える。ここで言う「ハイブリッド性」とは、断片の寄せ集め自体を指すのではなく、断片どうしの関係づけの二重性のことである。テノーレスや円舞の組み入れは、伝統という継承性（伝統保存協会が担うような）というよりも、＜牧夫＞たちのいまの生活世界における饗応との隣接関係の読み替えにかかわっているのではないか。そう考えれば、＜牧夫と昼食＞には「ローカルなもの」が消費されると同時に、もうひとつの「ローカルなもの」も現れているのではないだろうか（図1）。

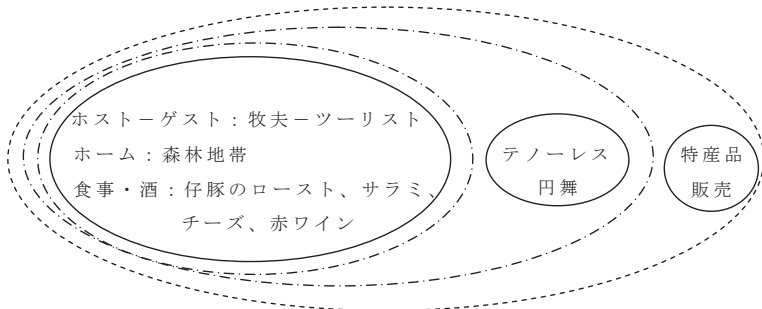


図1 <牧夫と昼食>の場面構成

ローカルな日常世界：協同作業後など宴会 ispuntinos など ()

村祭など ()

4 <^{オスピタリタ}客人歓待>のもうひとつの様相

牧夫が保持する太古の慣習として示される<^{オスピタリタ}客人歓待>だが、その概念を表す土地の言葉はなく、今日一般的に使用されているのはイタリア語の 'ospitalità' (歓待) である。'ospite' (客人) を指す 'istràndzu' という言葉はあるのだが、その意味は「受け入れられる人」、'foristeri' (よそ者、異邦人) と同義語だとされる。サルデーニャの他の地域と同様に、オルゴゾロでも 'foristeri' と 'istràndzu' は区別されており、前者は一般的に「よそ者、異邦人」、後者は「個人あるいは集団が一時的にある種の関係をもつよそ者、未知の者」のことである [Satta 2003]。この「ある種の関係をもつ」ことを 'ospitalità' とすれば、饗応を受けるツーリストは 'istràndzu' として扱われていることになる。<客人歓待>はあらかじめ決められたホスト-ゲストの関係に伴うもてなしというよりも、'istràndzu' の外部性を一方的な (非対称的な) もてなしによって示す行為ではないだろうか。つまり、村の日常生活のさまざまな場面に現れる饗応と無関係ではないのである。村の者どうしのもてなしの行為はつねに対等、互酬の関係となるが、よそ者はその輪に決して入れてはもらえない、一方的にもてなしを受ける存在として位置づけられているからである。たとえば、村のバルでも 'istràndzu' は奢ってもらえても、決して奢る側にはなれないが、村の男たちどうしならば、ワインの飲み合いをはじめ。奢ったり奢られたりできるのは、対等な関係が保証されているからに他ならない。このように村の日常的な贈与交換に着目して、<牧夫と昼食>の場所や場面構成をみると、森林地帯・牧夫-異質、テノーレス・円舞-伝統といった本質化された関係とは異なる結びつきを想定することもできる。

では、村の空間構成 (図2) から見てみよう。居住空間である *bidda* とその外 *sartu* から成り、広大な共有地 *cumunale*⁸⁾ は村の内でも外でもな

い。峻厳な山スプラモンテは sartu のなかで最も外、熟知している牧夫でも危険なところとされている。もっとも、近年はスプラモンテもエコツーリストで賑わっているが、〈牧夫と昼食〉の場所は、完全な未知の者ではない 'istràndzu' との結びつきで、森林地帯が選択されている。ここまではよそ者 'istràndzu' にツーリストを見たてて、その外部性と隣の隣接関係から説明できるだろう。

では、テノーレスや円舞、特産品販売はどうだろうか。これは伝統とか経済的なことだけではなく、羊の毛刈りやブドウの収穫など人手の必要な協同作業のあとの宴会 'ispuntinos'、村祭や聖人祭につきものの露店とよそ者 'istràndzu' の関係を考えなければならない。現段階では、放牧や農作業につきものの 'ispuntinos' が行われるのは村の外であること、手伝いにやってくる人は、隣村の人もいれば、牧夫や農夫ではない人（学生、会社員など）もいて、個を中心とした横断的な関係があることしかわからない。ほかの 'ispuntinos' の形態も見なければ、'istràndzu' と安易に結びつけることになるだろう。同じことは特産物販売にも言えるのだが、露店についてはその一般的な性格から、ある程度推論することは可能である。しかし、ここでは、〈牧夫と昼食〉における〈客人歓待〉の別な様相の一端を

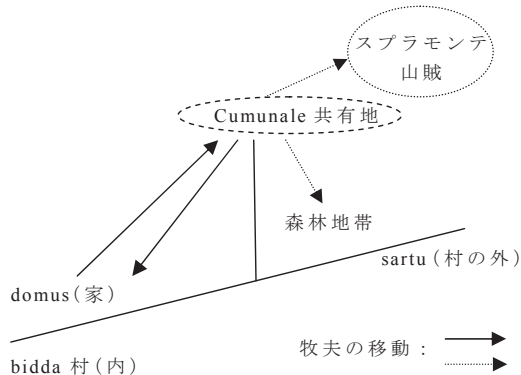


図2 村の空間構成

示すにとどめておこう。

むすびにかえて

「ローカル性に属する諸々の差異は、あらかじめ存在するものでもなければ自然なものでもなく、むしろ、ある生産体制の効果にほかならない」[ネグリ／ハート 2003:68]と断言してしまってもよいものだろうか。本稿の出発点はそこにあったのだが、「ローカルなもの」の別の様相はなかなか見えてこなかった。

サルデーニャやオルゴゾロの事例では、19世紀の旅人、地理学者、民族学者の目を引き、部分（本質化された）で全体を表すような、同一性を前提として記述されてきた地理的文化的特徴が、ツーリズムにおいても〈ほんもの〉（この場合は異時性）の要素として選択され、組み合わせられてつくられた文化的差異（固有性）そのもの、あるいはその活用ばかりが目についてしまう。それはツーリズムという土台、ネグリ／ハートの言葉を借りれば「生産体制」の効果である。しかしSattaが調査対象とした〈牧夫と昼食〉は、一見すればツーリズムという土台のうえでつくられた特殊性の一例にすぎないのだが、要素の選択や要素どうしの関係づけの「やりかた」に注意深く目を向ければ、そこには別の輪郭が透けてみた（図1）。

その二重性を確かめるべく、ここでは〈牧夫と昼食〉の消費される場所に、日常生活が営まれている場所を重ねてみた。その結果、〈客人歓待〉は自らの異質性を象徴的に刻印して自己演出される一方、受入／排除の線を巧みに引きながら、さまざまな関係を操作する儀式としての様相が見えてきたのである。これが生産体制の効果ではない、「ローカルなもの」のもうひとつの様相である可能性は高いが、確証を得るにはさらなる現地調査と理論の精緻化が必要となる。

(注)

- 1) フォークロアの観光活用は、州の観光局から地元の観光協会まで、あらゆるレベルで促進された。ヌーオロの民族博物館は学術機関となる前は、伝統衣装館として観光局が運営していた。また、伝統工芸品の生産を奨励し、ISOLAを設立したのも州であった。
- 2) accabadoras これ以上苦しめないように、安らかに死なせてやる高齢の女性のこと。
- 3) オルゴゾロは19世紀から山賊行為 banditismoの横行する土地として知られてはいたが、De Seta 監督の映画「オルゴゾロの山賊たち」(1961)で牧夫-山賊のイメージが決定的となった。
muralesは村の家々に描かれた壁画で、テーマは社会問題を扱ったものが多いため、反抗、抵抗、異議申し立てのイメージを村にまとわせている。
- 4) Appaduraiは、インドは「ヒエラルヒー」、[名誉と恥]は地中海世界のように、文化に地域を安易に結びつけてきた人類学者を gatekeeperだと批判している。
- 5) 「危険」までツアーの対象になっている。たとえば、キャリアの旅行会社が「誘拐ツアー」とよばれる企画を外国のツアー企画者に提示、日刊紙「サルデーニャ連合」(1997年1月16日)で論義を呼んだ。スプラモンテをガイドに案内してもらっているときに、山賊に襲われて「危ない目にあう」、スリル体験ツアーは、実現はしていないが、その年に多くのツーリストがオルゴゾロを訪れている。
- 6) Satta によれば「牧夫と昼食」の由来には、ふたつの説がある。ある主催者は、60年代初め、まだ十分な施設がなかったころ、フランス人大学生のグループが牧夫たちの小屋で盛大なもてなしを受けたことがはじまりだと言う。別の主催者の娘は、60年代の前半ごろ、ツーリストに仔豚のあぶり焼きを見せるために、海岸のリゾート地に数人のオルゴゾロ人が呼ばれ、その後、自分たちが出かけて行くよりも、ツーリストに来てもらって、牧夫たちと食事をしてもらうほうがよいと考えたことをはじまりとする。前者は牧夫の「客人歓待」の慣習、後者は観光用の実演と両極端な起源は、「牧夫と昼食」の両義性を表していると、Satta は指摘している。
- 7) 主催者は個人、地域活動グループ、ホテルであるが、いずれの場合も自分の友人、親戚、知り合いなどに声をかけて人手を確保しているので、牧夫ばかりではない。メンバーは固定されないため、複数の主催者の仕事を請け負うことができる。近年は「牧夫と昼食」の成功で、若者がアグリツーリズムに乗り出し、競争が激しくなっている。
- 8) オルゴゾロ (人口約4,400) はサルデーニャで最も広大な共有地をもって

おり、その面積は22,000km²を超える。ほとんどが牧地であるが、村に帰属している者であれば、だれでも使用することができる。今日の牧夫のほとんどが、村と往復しながら共有地で放牧を行うため、村で過す時間が増えている。バールの軒数の増加、1階を改造してガレージのような大きな部屋cameroneをつくる家が多くなっているのは、その証左と言えるかもしれない。

(参考文献)

- アーリ, ジョン(2003)『場所を消費する』吉原直樹・大澤善信監訳 法政大学出版局。
 ギデンズ, アンソニー (1993)『近代とはいかなる時代か? モダニティの帰結』
 松尾精文/小幡正敏訳 而立書房。
 原広司 (1975a)「文化としての空間 — 空間概念論のためのノート・均質空間論 (上) — 」『思想』第8号: 1-20。
 — (1975b)「文化としての空間 — 空間概念論のためのノート・均質空間論 (下) — 」『思想』第9号: 23-38。
 ネグリ, アントニオ/ハート, マイケル (2003)『<帝国> グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲ほか訳 以文社。
 米山リサ (1998)「文化という罪 — <多文化主義>の問題点と人類学的知 — 」『文化という課題』pp.41-66 岩波書店。
 レヴィ=ストロース, クロード (1993 [1972])『構造人類学』荒川幾男ほか訳 みすず書房。
 — (1992[1970])『人種と歴史』荒川幾男訳 みすず書房。
 Angioni, Giulio (1989) *I pascoli erranti. Antropologia del pastore in Sardegna*, Liguori。
 — (1990) *Tutti dicono Sardegna*, EDES。
 Angioni, Giulio-Sanna, Antonello (a cura di) (1988) *L'architettura popolare in Italia. Sardegna*, Laterza。
 Appadurai, Arjun (1986) "Theory in Anthropology : Center and Periphery", *Comparative Studies in Society and History*, vol.28(2) : 356-361。
 Ayora-Diaz, Steffan Igor (2000) "Hospitality in Sardinia. The moral construction of identities", *Europa VI* (1/2) : 229-257。
 Boscolo, Alberto (a cura di)(1974) *I viaggiatori dell'Ottocento in Sardegna*, Fossataro。
 Cagnetta, Franco (2001[1975]) *Banditi a Orgosolo*, Ilisso。
 Clemente, Ferdinando (1959) "Lineamenti di un programma turistico in Sardegna", *Commissione economica di studio per il piano di Rinascita della*

- Sardegna*, vol. II : 5-73.
- Fabian, Johannes (1983) *Time and the Other*, Columbia University Press.
- Canclini, García Néstor (1995) *Hybrid Cultures: Strategies for Entering and Leaving Modernity*, University of Minnesota Press.
- Gupta, Akhil and Ferguson James (1997) "Culture, Power, Place : Ethnography at the End of an Era", *Culture, Power, Place*, pp.1-29, Duke University Press.
- Herzfeld, Michale (1987) "As in Your Own House": Hospitality, Ethnography, and the Stereotype of Mediterranean Society", *Honour and shame and the Unity of the Mediterranean*, spec. publ. AAA, pp.75-89.
- Lai, Franco (2005) "Come si costruisce l'"autenticità", Turismo e consumo dei prodotti locali", Ceci, R. L. (a cura di), *Turismo e sostenibilità. Risorse locali e promozione turistica come valore*, pp.246-267, Armando Editore.
- Le Lannou, Maurice (1979) *Pastori e contadini di Sardegna*, Edizioni della Torre.
- MacCannell, Dean (1988 [1976]) *The Tourist. A New Theory of the Leisure Class*, Schocken Books. (マキャネール, ディーン (2012) 『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』安村克己ほか訳 学文社).
- Masu, Gianna (2002) "Il turismo rurale in Sardegna: ipotesi di sviluppo locale in un'ottica europea", Mazzetta, A.(a cura di) *Modelli di turismo in Sardegna. Tra sviluppo locale e processi di globalizzazione*, pp.133-171, FrancoAngeli.
- Poddighe, Roberto (2001) "Le immagini della comunicazione turistica", Fadda, A. (a cura di) *Sardegna: un mare di turismo*, pp.109-120, Carocci.
- Satta, Gino (2000) "Rischio à la carte", *Parolechiave* (22-24) : 289-307.
- (2001) *Turisti a Orgosolo. La Sardegna pastorale come attrazione turistica*, Liguori.
- (2002) "Maiali per i turisti. Turismo e attività agro-pastorali nel <pranzo con i pastori> di Orgosolo", V. Siniscalchi (a cura di), *Frammenti di economie. Ricerche di antropologia economica in Italia*, pp.127-157, Pellegrini.
- (2003) "Le pratiche dell'ospitalità <sarda>", Gallini, C.(a cura di) *Patrie elettive. I segni dell'appartenenza*, pp.61-91, Bollati Boringhieri.
- Sorge, Antonio (2009) "Hospitality, Friendship, and the Outsider in Highland Sardinia", *The Journal of the Society for the Anthropology of Europe*, vol.9(1) : 4-12.
- Valéry [Pasquin J. C.] (1996) *Viaggio in Sardegna*, trad.e cura di M. G. Longhi, Ilisso.

SUMMARY

Aspects of 'local'

— Orgosolo in Highland Sardinia —

Yasuko IMOTO

The identities and differences that are understood as local could be said to be nothing more than “the effects of a regime of production”. This paper describes an examination of a double aspect of ‘local’, based on the understanding that the local differences do not have any kind of a priori existence and are not things that are in some sense natural, but rather are constructed. With reference to G. Satta’s study and looking at tourism as a regime of the production of homogenization and heterogenization, ‘Hospitality’ represented as an eminent feature of ‘orgolese’ identity will be examined as a unique case. Staged for tourist consumption as being symbolic of the unique idiom of shepherders, “pranzo con i pastori” (open-air lunch with shepherders) are also something that exist as part of everyday life there. These lunches, which are put on for tourists, display authentic cultural elements, while at the same time making a clear distinction between insiders and outsiders, drawing both in as part of the cycle of exchange under egalitarian and reciprocal rule. Here we find a double exposure of what is “local.”